

遺品整理作業

雑然とした部屋のなかの遺品を、リサイクル品、処分品、形見分けといった具合にわけて手際よく運び出していく。最後は床をふくなどして終了。



キーパーズ
社長 吉田太一さん

Part 2

専門業者に依頼する

整理・片付けの最強の切り札

整理・片付けが自分の手に負えないとなったら専門業者を頼むことになる。専門家ゆえの、ていねいさもある。自分や親が亡くなったときの「遺品整理」を中心に、サービス内容や整理の現場を紹介する。取材は遺品整理業の草分けである、キーパーズ(本社・東京都)におこなった。

壇蜜さんも体験



テレビや映画に遺品整理登場

『終活読本ソナエ』の創刊号(2013年7月発行)に登場したタレントの壇蜜さんが同年8月、TBS系で放映された『サンデー・ジャポン』で遺品整理の体験レポートをした。壇蜜さんは葬祭専門学校に通った経験があり「終活」にも関心を寄せている。多忙なスケジュールを自主的にやりくりし、猛暑のなか3日間にわたって遺品整理業の仕事を経験したのだ。

1人暮らしをしていて95歳で亡くなった女性の部屋の棚から、子供たちがもらった賞状や卒業証書が大切に保管されているのを発見した壇蜜さん。「私も家族のことを考えながら仕事をした」「遺品整理には品物の整理や処分のほかに、亡くなった人の知らない一面を見つけて伝える役割もある」といったコメント(番組のHPより)をしたのだった。番組では、1人暮らしでひっそりと亡くなる高齢者が増えていくのにもない、遺品整理業

者に片付けを依頼するケースが増加していることなども紹介していた。話は変わって、2011年に公開されモンドリオール映画祭でイノベーションアワードに選ばれた映画『アントキノイノチ』。遺品整理業者で働く主人公が、仕事を通じて葛藤し成長していく様子を描いている。歌手のさだまさしさんが、テレビのドキュメンタリーで遺品整理のことを知り、書き上げた小説がもとになっている。

「共有」から「専有」へ

壇蜜さんが体験先として通り、さださんがモデルにしたのが、遺品整理業の老舗として知られる「キーパーズ」だ。遺品整理業という仕事は、昔からあったわけではない。キーパーズの創業も2002年だ。社長の吉田太一さんがまだ引越し業をしていたころ、遺品の整理に困っている遺族に、「ぜんぶ片付けさせてもらいますよ」と声をかけたところ、「あなたが神様にみえ

る」と喜ばれたことが、きっかけとなった。たった十数年前の話だが、それまでは引越し業者、廃品回収業者、清掃業者、リサイクル業者などを個別に呼んで片付けるしかなかったのだ。それが、活動実態はともかく全国で5000軒を優に超える業者が遺品整理業を名乗るまでになっているとみられている。なぜ、遺品整理という仕事が必要なのか。吉田さんは理由を2つ挙げている。ひとつは、家財の所有に関する時代の変化だ。「1人暮らしをする高齢者が増

えています。それにもない、身の回りの家財はひと昔前までは家族で「共有」されていたのです。だから専有していた人が亡くなってしまえば、身の回りのもの一切を片付けなくてはならない時代になったのです」「でも、すべてを片付けるのは大変な手間や時間がかかる。そこで、そんな遺族の助けになればと、この仕事を立ち上げたのです」

希薄化した人間関係

吉田さんが指摘する遺品整理業が必要とされる理由。もうひ

業者に頼むときのポイント

□しっかりした業者かどうかを見極める

見積もり額が安くても、サービスの質が落ちれば元も子もない。一方で法外な値段を請求する悪質業者もある。国民生活センターによると、「部屋も見ずに法外な値段を請求された」「あるはずのモノがなくなった」といった相談があるという

見積もりの積算がしっかりしているか、インターネットなどでの評判、創業がいつかといった情報は業者選びの参考になる

□必要なモノは事前に運び出しておく

□探してほしい遺品があれば、早めに伝えておく

印鑑、貴金属類、保険証書、通帳など

□作業全体に立ち会う

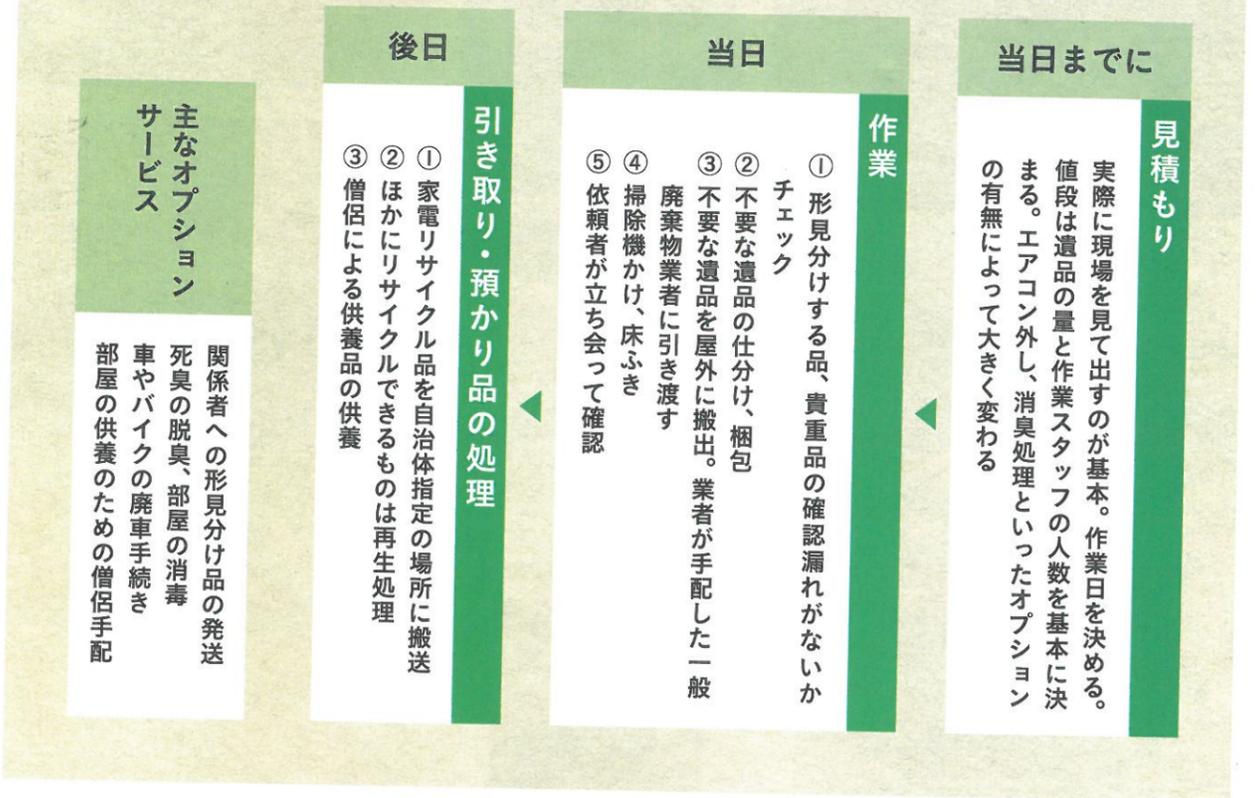
思いがけない品などが出てきたときには業者が相談するので、立ち会いがあればその場で判断できる。トラブル回避にも役立つ

□深い思い出のあるモノを無理に処分しない

手元にとっておくことができなければ、預かって供養してくれる業者もある

Part 2 業者に依頼する

一般的な遺品整理の流れ



遺品の供養

故人や遺族にとって思い入れのある大切な遺品は遺品整理業者が持ち帰って祭壇のある部屋で保管する。人形、仏壇、靴や服、アルバムなどが多い。その後、僧侶を招いて供養される(キーパーズ提供)



だからこそできるサービスを提供する存在でありたい」という。その具体例が遺品の供養だ。遺族が「故人が大切に使用していたので、捨ててしまうのは申し訳ない」と思った遺品は同社が預かり、後日、同社内の一室で僧侶を呼んで供養してもらうのだ。現在も祭壇が飾られた部屋には、人形、杖、車いす、仏壇、位牌、写真……といった多くの品が納められ、次の供養の日を待っている。

いまでは同様のサービスをしている遺品整理業者も多いが、これを手がけたのもキーパーズが最初だった。

遺族がいない遺品整理

キーパーズには、1人暮らしの人から「自分の遺品整理を予約したいのだが……」といった問い合わせがある。この5、6年の傾向だという。

子供や身内がいない完全な1人暮らしの人。「子供や身内に負担をかけたくない」という人や、逆に「子供や身内にはやってもらいたくない」という人も

「子供や身内には、自分の死を知らせてもらいたくない」という要望も多いという。

吉田さんは「いまのキーパーズは遺族のために遺品整理をする会社なので、本人からの予約は受け付けていません」という。問い合わせがあった場合には、予約は受け付けませんが、吉田さん自身が「相談に乗る」という形で、できるだけ話を聞いてくれる。遺品整理の話だけでなく、相続、家などの不動産処理、葬儀、納骨、遺言……、相談者の悩みは幅広い領域に広がっているという。

問い合わせをしてくる人のうち、本当に身寄りのいない人は2割くらい。吉田さんは、「やがては『遺族に頼まれた遺品整理』から、『故人に頼まれた遺品整理』をする時代になっていくような気がします」と話している。

そして、そんな時代が来ることを想定し、遺品整理だけでなく、家などの不動産処理、葬儀や納骨の手配といった多様な手続きを担えるような総合的な窓口となることを考えている。

とつは人間関係の希薄化だ。現在、キーパーズが扱う遺品整理の仕事は年間約1500件。半数が病院で亡くなった人、残りが自宅で亡くなった人。

自宅で亡くなった人のうち3割程度が、発見が遅れてしまったケースだ。メディアなどで「孤立死」「孤独死」といわれるケースにあたる。このなかには、発見までに時間が経過してしまい遺体が腐乱してしまった人の部屋の整理も含まれる。死臭ばかりでなく虫がわいている場合があり、家主や遺族では手に負えず整理の依頼がくるのだ。

東京都の統計だと、東京23区で死んでから発見まで1カ月以上を要した孤立死は2013年に約330人。10年間で倍に増えている。

大家族で暮らすことはなくなり、隣人さえ知らない団地やアパートの個室に住む人が増えている。コンビニの弁当や総菜を持ち帰ったり、宅配だったりといった「中食」が増えている。そんな世の中だから、死んでも気づか

れない人が増えている。実際に、ごみ屋敷と指摘されるような部屋の遺品整理をする時、1人でひっそりと食事をしたあとに散らかしたプラスチックの容器やペットボトルが多くあるという。

吉田さんは多くの現場を歩いてきた経験から、「社会全体で人間関係の大切さを意識していかないと、孤立死はもっと増えていくだろう」とみている。

遺品は生きざまを語る

「遺品整理の現場からは、故人それぞれの生きざまがみえてくる。そこから自分は、命や人間関係の大切さを学んできた。遺品はゴミではなくて、生きざまを発信している」と吉田さんは話す。

遺族も知らなかったような故人の生前を物語るような品物が出てくることもあるし、逆に遺族にとって思い出深く大切なモノがみつかることもある。

「自分たちはプロの遺品整理業者だから、遺族のような目線で仕事をすると同時に、プロ

体験ルポ 遺品整理の仕事

故人の人生を遺品が語る

暑くなりますよ

07・30

東京都大田区にある遺品整理業社キーパーズ事務所待合室から作業着を受け取る。「今日は暑くなりそうですね。作業着が汗でびしょりになるかもしれないよ」と秋本さん。

08・15

トラックで事務所発。横浜市の近郊にある一軒家に向かう。秋本さんが、この仕事に就いたのは3年前。人の最期にかかわると同時に、生涯が伝わってくる仕事であることを紹介したテレビ番組を見て、それまでの仕事からの転職を決めたという。「毎日、異なる現場が待っているの面白いです」

08・45

現地着。直接現場に向かったスタッフと合流。自分を含めて男5人での作業が始まる。築45年ほどの平屋4LDK。85歳の女性、夫に先立たれたあと1人

暮らしをしていたが、今春、自宅が倒れて亡くなった。死後2日ほどで、近所で暮らす娘さんが異変に気がついたようだ。葬儀業者の紹介で遺品整理の依頼が寄せられた。

09・00

部屋のなかの遺品は、娘さん(50)によってかなり整理されていた。きょうの作業には、その娘さんが立ち会うことになっている。

「いっぱい思い出の品があります。でも、それぞれに構っているとも捨てられませんものね。本当に必要なものは、すでに持ち出しました。いまこの家に残っているモノは全部捨ててください」と娘さん。

09・30

家の前で、2トントラック2台が待機。「アパートで1人暮らしだと、2トントラック1台で収まることが多いです。今日は一戸建てなのでもう少しあると思います」
一般的な費用なら約30万円という。

ひな人形が出てきた



10・05

大切にしていたひな人形が押し入れから出てきた。五人囃子とともに桐の箱に入っている。色はあせているが人形に傷みはない。「懐かしいですねえ。でも、お内裏様がないですね。母がすでに供養したのかしら」(娘さん)。秋本さんが「これはそのまま捨ててしまわないで、当社でお坊さんをお呼びして供養してあげてあげてくださいね」と話した。娘さんに確認。ほかの遺品とは別に、大切に持ち帰ることになった。

10・20

すでに亡くなっていた夫が使っ

ていたという将棋盤も同じ押し入れから出てきた。やはり供養されることになった。「懐かしい！よくまわり将棋をしました」。それぞれの遺品が、故人の生前を語りかけてくる。

10・30

別の部屋の押し入れからスケッチブックが出てきた。秋本さんが「これも供養しましょうか」。娘さんは「母が好きだったんですけどね。きりがいいから処分してください」ときっぱり。

11・00

娘さんたちが泊まることがあったのだから布団が4組。たんす4竿。本棚2つ。テーブル。棚……。ひたすら運び出して炎天下を歩いてトラックに積みこむ。冷蔵庫には「平成21年購入」とマジックで書かれている。故人の几帳



片付け終わってさみしさもあり

14・30

追加応援で来た2トントラックも荷が積み込まれる。当初は夫と暮らしていたとはいえず、故人は普通の1人暮らしの3倍になる6トンもの荷物のおかげで暮らしていたことになる。娘さんは「あつという間に、きれいになっちゃいましたね。うれしくもあり、さみしくもありという心境です」。

14・40

終了。「きょうの現場は極めて順調に作業が進んだパターン。このような現場が半分くらい、あとの半分は死臭のなかでの作業だったり、何かしらの困難があります」と秋本さんが話してくれた。

15・00

近くの駅で車を降ろしてもらって「おつかれさま」。空腹になっている自分にはじめて気がついた。電車に乗る前に食事でも。汗をかいたから「生中ひとつ！」

太陽照りつける8月某日。『終活読本ソナエ』では遺品整理の現場を体験してみた。すると、確かに遺品が、故人の生前の暮らしぶりや性格などを語りかけてくるのが分かった。体験の1日を紹介する。

(故人や遺族が特定できないように記述しました)

落胆、近所の老女

11・40

向かいの1軒家に住んでいるおばあさんが出てきて、娘さんといさつ。娘さん「大変お世話になりました」。おばあさん「いままでは、いろんな話ができただのに……。さみしくなっちゃうねえ」。きつと1人暮らしの者同士が支え合って生活してきたのだろう。このおばあさん、話し相手がいなくなってしまうよう、本当にさみしそうだった。

11・45

休憩。水分補給。当初の作業時間予想は6時間。「娘さんがかなり整理してくれていたので、



予定より早く終わらそう」と秋本さん。「自宅で倒れた場合、夏だと4日ほどで遺体に虫がわくことがあります。そうすると強烈な臭いが残ってしまいます。薬剤や特別な装置を使って臭いを消すんです。遺族が個人でやるのは無理だと思っています」

12・15

作業再開。家の周りの物干し竿、脚立なども処理。金属製品や書籍はリサイクル扱いにする。本のタイトルからは故人の関心ごとが分かる。「おいしい夕ご飯」「簿記入門」……。壁に貼ってある観光地のペナントを剥がす。「佐渡」「博多」。故人の人生の楽しいひとときが伝わってくる。壁に



秋本さんが、玄関の前にあった新聞受けを解体。木製の表札も取り外した。「この表札の文字。父が書いたものなんです」と娘さん。これも廃棄の前に供養することになった。